

『卒業式に向けて』

3月は、子どもたちのそれぞれの学年が終わりを迎え、次のステージに向けて期待と不安を胸に日々を過ごす、楽しみではありながらも、しかし落ち着かない毎日であると思います。特に卒業を迎える子どもたちにとって、学校生活の集大成であり、卒業式を成功させるべくたくさんの準備や練習を日々がんばっていることと思います。そのような中で、ことばを流暢(スラスラ)に話すことができない吃音や、場面緘黙の子もたちが、大舞台を目前にしどのような気持ちで過ごしているのか、大人になった当事者の報告や最近の研究をもとにお伝えしたいと思います。

吃音とは

吃音は、おおよそどの国でも100人に1人の割合で発症します。2〜4歳では20人に1人の子どもに現れ、その後4年の間に74%の子どもが自然回復します。吃音はことばの発達過程で生じるもので、決して親の育て方や本人のせいではありません。吃音には第1層から第4層までの段階があり、幼児期は第1層(繰り返しや引き伸ばし)が多く、小学生の学年が上がるとともに第2層(最初の二音が出ない、体の動きを伴う)から第3層(吃音が出る不安にとらわれ、ことばを言い換える)、第4層(吃音に恐怖を感じ、話すのをやめる、話す場を回避する)と進みます。第3層、第4層の症状の子どもは、リラックス時にはスラスラと話すこともあるので、外見では吃音が

治ったかのように見えます。治ったのではなく、本当は重度化していることを、両親でも見抜けない場合が多くあります。

場面緘黙とは

場面緘黙は、「不安や恐怖によって話したくても話せない」状態であり、不安や恐怖を抱く対象は人それぞれ違い、安心して話ができる特定の人(多くは家族)とは話すことができます。場面緘黙の症状は多様で、学校や外出先では全く話せない子どもいれば、特定の先生や友達とは話せる子どもおり、ことばだけではなく、動作や表情にも気持ちを表せない場合もあります。自分が話せないことを知っている人と話すことは難しくても、自分が話せないことを知らない先入観のない人と、不意に話せることもあります。

集団の中での苦しみ

吃音、場面緘黙を持つ子どもはそれぞれ症状は違いますが、いずれにしても、ことばを強要することが状態を悪化させる点では共通しています。学校生活の中では、リラックスした友達との談話の場面や、日直や発表、音読などの緊張を伴う場面があり、子どもたちは場面ごとに、安心したり、不安や恐怖を感じていたりします。それによって表現することは、吃音や緘黙の症状が妨げてしまうので、周囲に正しく理解されることは難しく、人知れず深刻に悩んでいることがあります。

なかでも、卒業式という大舞台での「発表」や卒業証書授与時の「返事」は、非常に大きな悩みとなっていることがあり、ややもすると死にたくなるほど深刻である場合もあります。特に高学年では、周囲に悟られることをとても恐れている子どももおり、適切な配慮をしなければ、なかには頭痛や腹痛として身体症状に現れ、卒業式当日を含め不登校になってしまうこともあります。

合理的配慮のさまざまなかたち

すでに成人された吃音者に尋ねると、卒業式や入学式が大きな壁であったという人がたくさんいらっしゃいます。特に「返事」に関しては、言える気がせず当日休んでしまった人もいれば、「返事」じゃなく会釈でも良い、「返事」を5秒待っても言えなかつた時はそ

のまま流す、など学校と話し合って決め、無事に越えることができた人もいます。決してわざとではなく、「はい」と言いたい気持ちはあるが、不安や恐怖が高まると喉が金縛りにあつたようになり声が出てこない、だがそれは、当事者でなければわからない孤独な「闇」であると教えてくれた人もいました。

卒業式は、卒業するまでの学校生活をがんばった子どもたちへの賞賛の場であると思います。そして次のライフステージへと送り出す場でもあります。ひとりひとりの子どもが、晴れやかにその日を迎えられるよう、個々の特性に合わせた配慮がなされることを願います。



文書寄贈 参考文献
NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてつぷ」
▽エビデンスに基づいた吃音支援入門(学苑社 菊池良和著)
▽吃音のリスクマネジメント(学苑社 菊池良和著)
▽学校における場面緘黙への対応(学苑社 高木潤野著)